

侵食

ビルの隙間を縫って甲高い女の叫びのような声を上げていた暴風が止む。

(ツ…！ なに！？ 耳が痛い!!)

大規模火災で膨張していた大気が、足元に這い寄る海原の吐き出す夜霧に冷やされ、海に接するもの達の鼓膜の内と外に気圧差を生む。その予期していなかった激痛に、あるものは小さく呻いて蹲り、またあるものは身を硬直させた。ざぶざぶと水を蹴りながらの行軍で歩みが重くなっていたところを航空性中耳炎が目敏く襲撃し、避難者たちの歩調を凍らせる。

パキリと一度、炭が萎縮する音が聞こえて、無音がその巨大な身を起こし、風の音も、水の音も、火の音も無くなり、脳を殴りつけるような耳鳴りだけがうるさい。

誰が何かを見付けたわけでもないのに、人々が周囲を頻繁に見まわしている…

緊張は人から人へと伝播し、無意識に呼吸を薄くした。

歩みを止めたことで筋肉からの発熱を失い、足元から全身の体温が奪われ、次第に身を

カタカタ震わせ始める。

何故、誰も動こうとしないのか。

何故、こんな寒いのか。

何故、こんなにも息が詰まるのか。

そういえば、いつの間にか隣にいた人の姿が見えなくなっている。

：サアー：つと、正体不明な何かの振動が背筋を凍らせる……

心臓が飛び上がり、今すぐ走り出したい衝動に駆られたが、少しでも動けば足元の海が波立ち、正体不明に自らの存在を晒すことになる。

何も見えない聞こえない。だけど、だからこそ、恐怖の元を探ろうと神経が張り詰める。バクバクと早打つ心臓を自らの意思で止められないことが、こんなにも精神を掻き巻くと知りたくはなかった。

息を殺してやり過ぎたいと願うも身体は言うことを聞かず、震えはどんどんと大きくなってゆく。いっそ気絶でもできたならと思わずにいられない。

数十メートル後方で男の絶叫が上がった。

水中のガラス片や、錆びた鉄クズに、身を切り裂かれながら手探りで悲鳴から逃走する。魔界における人の命など倫理無き幼児に弄ばれる虫けら同然。

握り潰されるだけならまだ良い方で、好奇心に駆られれば最後、気分次第で手足を挽かれ（もがれ）、挽がれたその自らの手足に串刺しにされて他の虫に生きたまま喰われるところを鑑賞されたり、どうせ殺すのに絶望して動かなくなるまで無意味に水責めを繰り返したりするのだ。

「たすけて… いたい… いたい…」

逃げる道すがら全身を踏み折られた誰かにかち合う。

一瞬見捨てる罪悪感に囚われ、その人の身体に触れると「ぎゃあああああああああ」と大きな悲鳴を上げられる。その声を聞いた瞬間に、罪悪感は消え失せ『どうしてこんなやつを助けようとしてしまったんだろう』と怒りがこみ上げて、そいつの身体を殴りつけて逃げだす。

逃げた直ぐ後ろで、ジャバアアアつと何か引きずられていく音が聞こえたが関係無い。

怖い。死にたくない。

だいぶ離れられたらうか。

さつきから耳がよく聞こえないので距離が分かりにくい。

触覚だけが頼りだが、ずっと凍てつく様に冷たい水の中に浸かっていたせいで、かじかんでいて、それも大まかにしか分からない。

膝が痛い。

爪が痛い。手が痛い。

泣き声を殺し続けた喉が痛い。

壁にぶつかった。

すぐさま壁にペタペタと手を這わせて探ると、それは腰上ほどの高さまでしかなく、どうやらシャッターか何かに開いた人が通れる程度の大きさの穴の様だった。

(ああ！ 助かった！助かった！助かった！勝った！)

助かるかもしれないと希望がわき上がる。

ギザギザとした縁に体重を乗せて、倒れ込むように向こう側へ。

地面がブニブニと柔らかい。

「あふあっ」

ドスンと下から大きな衝撃を受けて目が覚める。怪物の肉襦袢がクツシヨンと成り、身体へのダメージは無い。

天上が割けて、降り注ぐ清らかな月光とアメシスト色の光に包まれる。

「ああ…… ああ……っ！」

諦めた生への歓喜に震え、言葉が出ない。

「大丈夫ですか？ もう怖いことは何もありませんからね」

…なんて神々しいのだろう。

なんとという美貌… この御方が神…救い主…きっと私の祈りが届いたんだ…

「ここは月神さまの神殿です。

全てが片付くまでの間、どうぞこちらでお休みください」

柔らかな温かな神の揺りかごの中で、私は安らかな眠りに落ちた。

*

月食の下、東郷美森に神託が下される。

「まさかまさかまさかまさか！」

神託の内容は『結城友奈が神隠しに遭った』『壁を目指せ』の二つ。

直ぐに風へ確認すると、友奈は月の巫女を連れて、こちらへ向かったあとだという。

東郷が巫女の眠る安置室へ全速力で駆ける。

「居ない！ 居ない……！ 友奈ちゃんは何処……!？」

眠っている巫女たちのみを確認し、廊下で三ノ輪銀とすれ違う。

「おわっ!？ どうしたんスカ東郷さん!？」

「銀！ 友奈ちゃんを見なかった!？」

「えっ、えーと、見てませっけど、声は聞いたかも……!？」

銀の肩をがっしりと掴んで追究する。

「どこ!? どこで聞いたの、銀！ お願ひ、思い出して!!」

騒ぎを聞き付けて人が集まり始めた。

「……あゝ、わっしー先輩くんばんはゝ。何事ですかゝ？ …… Zzz」

「園子良いところに……！ 友奈さん、どこ行ったか知らないか?! 東郷さんが探してるっ

て！」

「月の巫女をここに移送した後の消息が掴めないの！お願い園子ちゃん！」

ここまで切羽詰まっているのには理由があり、当然、神託を受けた東郷は友奈のスマートフォンに仕込まれたGPSによって居場所を探索したが反応が無く、大赦の防犯監視システムをハッキングして映像記録を確認しても、この対策拠点から出た痕跡無く、神託によって失踪が伝えられたのが予言ではなく事後報告だと発覚したためである。

「ほえ……… それじゃあ、蓮華先輩が何か知ってるかもですね……… ……」

「蓮華さんなら表に！」

「ありがとう園子ちゃん！銀！」「はい………」

玄関まで向かうのも面倒だと、蹴破るように変身して窓から飛び出した。

「…東郷さん、すごい剣幕だったけど…何事も無ければいいなあ…」

とこと廊下の奥から歩いてくる人影が見える。

「ちょっと、銀！ そのっち！」

まだ抵抗勢力の襲撃がないからって、あまり持ち場を離れてはダメよ！」

人影は、厨に行ったつきり帰ってこない銀を探しに来た鷲尾須美だった。

「おお、すまん、須美。いま東郷さんに会って：」

「東郷さんと…？ まあ、いいわ。戻るわよ、二人とも」

夜間外出を禁じられている小学生組には、町の様子は伝えられていない。

「——でさー、どこ行っちゃったんだろうな、友奈さん」

「用事が済んだから風さんたちのところに戻ったんじゃない？」

「うーん、そうなのかなー。東郷さんのあの鬼気迫る感じは、ただ事じゃなかったけど」

「果報は…寝てま……ス」

「…そのうち。眠ったまま歩くと危ないわよ」

玄関の灯に照らされる主の居なくなつた蜘蛛の巣には埃が絡まり、もはや捕獲機としての機能は失われていて、喰われることもなく取り残された虫のミイラたちが、寂れた駅の表札のように、そよ風に揺れている。

大赦の重要施設の殆どは、如何なる事態に見舞われても独立して機能し続けられるよう

に設計されている。それは勇者たちが寝食する対策拠点も例外ではない。

二人の勇者が施設の屋上で敵の襲撃に備えている。

「ムーンイート…あの夜を思い出すわ…」

この大停電によつて、ぼつん、ぼつんと大赦施設の星図が浮彫にされていた。

「ねえ、私は助かるけど、やっぱり蓮華さんは安置室にスタンバイしていた方がマストじゃないかしら？ 敵の巫女さんたちテレポートしてくるんでしょ？」

「…そうね。友奈たちの話も気になるところだし、弥勒は一度退がるわ。何かあれば、遠慮なく弥勒の名を呼びなさい。」

「蓮華さん！」

蓮華が屋上の扉に手を掛けたところで、何者かが落下防止フェンスを飛び越えてくる。表というから周縁に居るものと思ひ、施設の外周を何周もさせられた東郷が赤い顔で現れた。

「フツ、待っていたわ、東郷。」

弥勒の手に掛ければ、どんな難問も問題にならないわ」

友奈失踪の件を伝える。

「ふむ……結城と会ったのは弥勒が最後のようだけど、生憎巫女を引き取った後のことは知らないわ……」

詰問しようと東郷が蓮華に掴みかかったが、直ぐに考えを改め開放する。

「東郷さん……」

ブルブルと東郷の身体が揺れている。

「中立神……月の巫女……友奈ちゃん……壁の……外……」

おのレェギッ立神イイイジッ……

「と、ととととととと東郷さん?！」

怒嗟の呻きを上げると光に包まれ、触手のように動く八本のレーザー射出機構を備えた戦艦が顕現する。東郷は空へ一発、破壊の息吹を撃ち上げ、空気の壁に開けた風穴から飛び去った。

「ど……どうしましょう蓮華さん。東郷さんが一人でテークオフしてしまったわ……」

居残り組は防衛の他に巫女を監視する任を負っており、大赦は東郷の単独先行を巫女の脱走と捉える恐れがある。

「そういえば、巫女の引き渡し後、神奈に話しかける結城の声を聞いていたわね」

「追いかけた方がいいのかしら…」

「無問題よ、歌野。あの様子なら、少なくとも東郷は中立神の一味ではない。故に、野に放つても、中立神にしか危害が及ぶことはない」と弥勒は推察するわ」

「でもそれって容疑者の巫女さん達も危ないんじゃない？」と口を衝いて出かけたところで、バゴオン！と大鐘を叩き割るような音が空を揺らし、グランディオーソ・パーテックスが出現する。音を聞きつけ小学生組も合流。

「歌野さん！蓮華さん！」

「…まあ、とりあえず、先ずは目の前のエネミー達を片付けるとしましょうか！」

「一番槍往きます！ どりゃあああつ！」

ガキン！ スピートと打撃力を併せ持つ銀が先陣を切り、両の大斧を幾度も叩き込むが全てグランディオーソの硬い装甲に弾かれてしまう。

「痛ったあー！ 手がビリビリするっ！ こいつ滅茶苦茶硬いです歌野さん！」

次はこちらの番だと、弾かれて空中に身を投げた銀に向かって、グランディオーソの巨大な二本の腕が縦横無尽に振り降ろされる！

「ミノさん！」「銀！」

すかさず、須美が射撃で軌道を逸らそうと矢を放つが、硬く重量の籠った剛腕を凌ぐにはパワーが足りない！

「(盾じゃ間に合わない！) けど、これならっ！」

素早く跳躍し、園子が盾となるには足りない間合いを、浮遊する槍の刃を銀の前に展開することで埋める。

ガツン！ 完全に勢いを殺すことはできなかったが、浮遊する刃がクツションとなり、銀が受け止めるには十分な威力に減じさせることができた。双斧を揃えてグランディオーソの腕を横殴りにし、その反作用で直撃を躲して地面に着地。

「サンキュー園子！ 須美！」

「次は私が相手よ！ 攻防一体のウィップシールドを食らいなさい！ はあああああ！」
鞭が高速で風を切る度に遠心力が加算されてゆき、勇者の動体視力でも追えない鞭の残

像結界が出来上がる。その鞭に蓄積した運動量で敵の攻撃を弾き飛ばし、長く鋭く伸びた鞭がグランディオーツを突き刺す…！

「ふむ；銀の近接攻撃も、須美の遠射攻撃も、歌野の範囲攻撃でさえも大きなダメージは見られない。…はあっ！」

蓮華の光のサーベルが打ち込まれると、同時に、パツと光が何かに当たって散らされる。歌野の鞭が敵の装甲に衝突する度、バツン！バツン！と雷撃が放たれた様な衝撃波を発生させているが、その誇大な衝突音に反して、照らし出されたグランディオーツには傷一つ付いていない。

「歌野！ 銀！ やつの体表を覆っている見えない障壁のようなものを剥がさないと、幾ら打ち込んでもダメージにならないわ！」

「オーケー！ クリティカルにキメないと駄目なパティーンね！」

「了解っス、蓮華さん！ でもこの暗さは、中々きびつ、しいっ！」

月の姿をすっぽりと隠してしまった地球の影の中で、どこか障壁に綻びは無いかと目を配らせながら攻撃を繰り返す。

「私たちも…！くっ！」

この視界不良の中で出鱈目に矢を放っても方に一つも急所には当たらず、むしろ前衛への誤射の危険のほうが遥かに高いだろう。特に、赤色の波長は闇に溶け易い。

『力になりたい』

『実力もこの数年で磨かれて不足はないはず』

『機会、相性、たったそれだけのことで届かない』

弓を引き絞ったまま硬直させた須美の手が痙攣を始める。

『銀たちなら躲してくれるかもしれない』などという憶測で危険を冒すわけにはいかなかった。

「大丈夫、わっしー？」

「そのうち……今は戦闘中よ？」

バーテックスの襲撃にも関わらず樹海化しないという異常事態にさえも、緊張感の無いほんわかとした空気を纏ったまま、園子が須美の顔を覗き込む。

「うん。戦闘は大事だけど、敵はバーテックスだけじゃないからね」

「そうか……！ そのうち、私！」

園子はただ黙って頷き、行っつらっしやいと手を振って須美を見送る。

「さて、私も行かなきゃかな！ ミノさ〜ん！ 歌野先輩！蓮華先輩ば〜い！」

「なんだー園子ーっ！ なんか妙案でも閃いたかー!？」

「ううん〜！ そうじゃなくって〜！ 明かりと水都先輩たち両方を守らないといけないから、私とわっしーは退がるね〜って！」

攻撃の手を緩めることなく応答を続ける。

「わかったー！ 暗いから足元に気を付けて、途中で眠っちゃわないようになー！」

「フッ！ 歌野たちも、ここは弥勒に任せて先へ行ってもっ、構わないわ、よっ！」

「いいえ、蓮華さん！ ここまで来たんだもの！ フィナーレまで付き合うわ！」

「いや、そもそも、この場合の先ってどこなんスカ ねっ…！」

ゴォオン…と一度、頭上から重い鐘の音が聞こえたかと思うと、一拍の後、怪音波と共に強烈な頭痛に見舞われる。

「つぐウウ…！上に何かいるわ！」「タウラスの怪音波…?!」「でもっ…姿が見えない！」

長距離射撃が行える東郷が飛び去り、須美さえも屋内に退いてしまった今、攻め手を封じられた勇者たちが一方的にタウラスとグランデイオーソに廻られ始める。

「くそ…！ あいつ、ずっとこのタイミングを！ …頭が割れるっ！」——

——大赦本庁。

「ふくん、薄鬼さん部隊かゝ。そういえば初めて義体見せてもらったときに、楓さん『大赦が後で流用しやすいように考えた』って言ってたっけ。』」

廊下を埋め尽くして整列する、楓と同じ姿の人形達。

彼らの言葉からは、生き物の有機的な温かみは感じられない。

「違うつてのは分かっているけど。氏紙が沢山居るみたいで正直気味悪いわね。』」

「お姉ちゃん。』」

時刻は月食が始まるより前。レジスタンスたちが退却し、対月の巫女用に大赦内で警戒を続けている赤嶺友奈・秋原雪花・犬吠埼姉妹・三好夏凜・乃木園子の6名は、作戦に際し、薄鬼から説明を受けていた。

「お姉ちゃん、起きてっ。』」

「ま、まあ、今回は風さんが気絶したのも無理ないと思う。』にやあ」

その場にいる全員が同様に苦い顔を浮かべている。

『登場シーンはインパクト重視か、しれっと、いつの間にか隣にいるかのどちらかだろう』と判断した彼ら薄鬼は、勇者たちが一人一人孤立したところを狙って、ゾンビ映画のようにわらわらと大勢で群がり取り囲むという戦法を取った。その結果は予定調和的な勇者たちの絶叫と鉄拳。

「ポトポトと、木の上から人っぽいものが落ちてきたかと思えば、それが血の気の無い女の子たちで『息もしてないし、どうしょ…!』って混乱したら横から冷たい手に掴まれて一斉に動き出してしがみついてきて、あつと言う間に揉みくちやに……」

「はぁ…夢に見そう…」

「あの手順、絶対要らなかったわよね…」

「勇者様達だと直ぐには気付かず、申し訳ございません。重ねてお詫び申し上げます。」

それで先ほどお伝えしました通り、我々は引き続き野外警備に当たりますが、通信用に一機置いて行きますので入用の際は何なりと申し付け下さい」

そう言って深々と一礼し、一体を残して数十体の義体たちが退散する。

「…なんというか、台詞が読み上げられてるだけって感じ」

「登場の仕方は楓さんかな？って思ったけど、違ったみたいだね〜」

「この後はどうするの？ 大赦の防衛は勿論必要だけど、街の方が大変なことになってるみたいだし、ただ待ってるだけってのも落ち着かないんだよねー」と、そわそわと腕にサイド・トライセプスで負荷を掛けながら赤嶺が言う。

「んー、後手に回るのもやな感じだけど、これまで同様、調査くらいしかできること無さそう…：あ、樹ちゃんにワイヤートラップ仕掛けてもらうのは妙案かも！」

「神官さん達には、守備の効率化のために一ヶ所に集まってもらってるけど、ヒナたん達にしてみれば、おフクロネズミさん一網打尽のチャンスだからね」

「ト、トラップの知識なんてありませんよ、私い…」

薄鬼が「こちらでお調べいたしましょうか？」と話しかける。

「はえっ…?! えっとお…」

「ちよつと、樹が困ってるじゃない」と夏凜が雪花と園子を視線で刺す。

「メンゴメンゴ許してちゃい。ちよつと気になったんだけど、薄鬼さんたちの情報って

常に共有されてる感じではないよね？」

「はい。同期しておらず一体一体が独立しているため、リモート機能を用いた視界共有やアナログな機体間通信で情報を共有しています」

「楓さん定期的に大赦に検査しに行ってたし、多分まだクラウド化はしてないんよ」

「自走式監視カメラだけどネットワーク構築は不完全、か……」

雪花が腕を組んで思案する。

「風さん気絶してるけど、話すなら今……かな。いつ戻って来るかも分からないし」

「どうしたのよ、雪花。齒切れが悪いわね」

雪花の推理では大赦内に間者が紛れ込んでおり、大赦内の情報は敵に筒抜けとなってる。そのため、極力大赦の目を避けて行動できる策を講じる必要があった。

「例の件、赤嶺は蓮華に。園子は若葉達に連絡して。メールは気付かれないかも知れないから電話でよろ」

はつきり皆まで言わずとも、雪花の大赦の検閲を極力回避したい旨を理解した二人は、

薄鬼に話を聞かれないようその場を離れる。

「雪花さん、例の件って何ですか…？」

「んにゃ、敵さんの狙いはなんだろう？って話」

「なるほど…ずっと分からないままでしたもんね」

「それって結局なんだったの？」

「ヤ、今もワカンナイままだけど」

「謎が解けたわけじゃないんですね…」

危機的状況にあっても勇者たちは落ち着いている。

大赦への直接攻撃があるということは、最悪戦闘中に勇者システムを奪われる可能性があるということなのだが、『バーテックスを相手取るわけではないのだから』と想定が甘くなっているか、精霊バリアに守られながらの戦闘に慣れきってしまったているのか、内心の詳細はともかく神世紀の日々は彼女たちに楽観を植え付けるに難くなかった。

彼女たちは決して油断していたわけではなかったが、『それでも死は遠いだろう』とバーテックスたちとの戦闘を生き延びる度に、認識に小さく空いた隙間が拡がり続けている。

玄関の戸を叩く「Thanatos の存在に、いったい何人が気付いていただろうか？」

「んで、今後の方針だけど。」

多分もう敵さん達には侵入されてるから、要所を手分けして守ることにしない？」

「私は構わないわよ」

「要所って、やっぱり発電機とかですか？」

閉鎖された施設内に何処からともなく風が細く吹き抜ける。

「ううん、イツつん。大赦は最悪の最悪の場合、神樹様からエネルギーを別けてもらえ
から、その重要度はそこまでじゃないんだ」

「お帰り、園子。若葉の様子はどうだった？」

「むふふふふっ……！ぐんわかの新たな一ページが紡がれていたところだったんよ」

「なにそれ気になる」

「？ アハハ……それは二人に悪いことしちったにゃ」

「こっちも、レンちに報告終わったよー♪」

赤嶺も連絡を終えて、手を振りながら戻ってきた。

「ほら、風！ アンタも、いい加減起きなさいっ！ でないと一人だけ置いてくわよ！」
夏凜が風を起こそうと強く揺すったり、頬をペチペチと叩いていると、するすると薄鬼が歩み寄ってきて冷気を帯びた手で風の首筋を優しく包むように撫であげ「うきやあああああ!! 首絞めオバケ?! 金縛り?! ヤダ置いてかないで憑りつかれる！ 独りにしないでええ!!?」 「ちよ、暴れっ?! だあっ?!」 「わあああ?! お姉ちゃん落ち着いて！」

錯乱して暴れる風のリミッターの外れた馬鹿力で体幹を崩され、夏凜が尻餅をついて呻く。

「そんじゃま風さんも起きたことだし、あと宜しくねー！」

「行っってらっしや〜い♪」

園子が軽く手を振って雪花を見送る。

「あら…? 何処ここ? アタシどれくらい寝てた? ……あのオバケは?!」

目を覚ました風が、挙動不審に辺りを見回している。

「んー、20分くらい?」

「薄鬼さんならアッキーが連れてっっちゃったんよ〜」

「……敵が攻撃を始めた今、だま——ジリリリリ!!——っ、もう!」

雪花たちが十分離れたのを見計らって赤嶺が話し始めたところで火災報知器が鳴り、言葉が遮られた。直ぐに背後の観音開きの扉を押し開き、神官たちの安否を確認する。

「赤嶺友奈様！これは」

「ほっ… とりあえず、みんな無事みたいだね。」

夏凜と樹ちゃんはここで神官さん達を見てほしいんだけど、いいかな？」

赤嶺の指示に対して夏凜が腕を組み、眉間にしわを寄せる。

「…赤嶺。アンタはどうする気？ さっきから園子と雪花とアイコンタクト取ってたみたいだけど、あんた達なに企んでんの？」

追究に対して、一瞬赤嶺も園子も言葉を詰まらせる。

それは神官に扮しているかもしれない敵を警戒しての反応だったが、事情を知らされていない夏凜の目には不審に映った。

「にぼっしー、企んでるだなんて人間きが悪いんよ…」

「私だって園子ほどではないけど、大赦関係者なのよ。兄貴…身内だってこの部屋に居

るはず…」

思い起こされる、ひなたたち巫女の離反。

中立神による洗脳と、四国を満たす狂騒。

大赦の監視網で捉えられない敵。

何かを企てていて、そのことを隠そうとする仲間たち。

「私、あんた達を信じたい…でも。もし、あんた達まで洗脳されていたらって…だって、絶対無いなんて分からないでしょ…!?」

闇に潜む悪霊たちは、芽吹いた猜疑心を見逃さない。

夏凜も夏凜なりに大赦から情報を集めて、独自に調査を行っていたようで、雪花らと同じような仮説に行きついていたのである。ただ、調査を一人で行っていたことが裏目に出た。誰を信じていいのか分からなくなってしまうていた。

「ちょっと夏凜アンタどうしたの? ……震えてるわよ?」

「うるさい! ……何よ!? いったい何だっというのよ!!」

過呼吸気味に息を乱し、青ざめた夏凜の顔に脂汗が浮かぶ。

「にぼっしー、私達は操られてなんかいないよ。だから落ち着いて…」

「じゃあなんで隠すのよ！ 仲間に話せないようなことだからでしょ!? 私のっ！私の大
事なっ！いやっ！やめて…！」

目尻が割けてしまいそうなほど見開かれた目は激しく瞳孔が伸縮しており、誰が見ても
今の夏凜がまともな状態ではないと判った。

常軌を逸した様子を見かねて風が手を伸ばすと、逃げるように夏凜が距離を取る。

「夏凜どうしたの?! ホントに変よ!! 何かあるなら話して…!!」

後方から、一部始終見聞きしていた神官たちのざわめきが聞こえる。

『勇者様は無事な筈じゃなかったのか?』

『三好夏凜様のあの様子はただ事じゃないぞ』

『これも敵の攻撃なのでしょう?』

『おかしくなった巫女たちに似ている?』

『三好様は、神託は受け取れないはずだろ…!!』

『なら、どうしてあんなってるんだ! おかしいだろ!』

『勇者様たちまで…!!何か手はないのか?!クソっ…!!』

八本の触腕を思わせる砲門を一点に集中させ、大熱量によりプラズマ化した水素が巨大な光弾を生み出す。

「吹き飛ばええええ!!!!」

不可視存在に着弾。衝突でエネルギー塊を球状に留めていた力場の均衡が崩れ、大爆発を起こす……! 大気の無い壁の外では爆音は聞こえず、空間を揺らす衝撃波だけが東郷の肌へ返ってくる。

「友奈ちゃんを返しなさい、中立神!」

爆裂の光が止み、中から衛星を思わせる中立神の化身が現れたが、直ぐに端から闇に消えようとしている。

「(させないっ!) 追撃用「つと、そうは問屋が dont cry (どんと暗い)「っ!」

東郷は突如背後に現れた桐生静に気を取られ、中立神の化身を取り逃がしてしまった。

「その言葉遣い……やはり敵に付くようですね」

「商売あがったりで電気代も払えんで、もう暗うて暗うて、毎日爪に火を点す様な日々……それ問屋さんも泣いてまうよなあ………つって特に意味は無いんやけども。」

まー成り行き上なっ♪」

ニコニコと敵意を感じさせない表情を浮かべながら、東郷に対して効果的な妨害を行ってみせた静。

「にしても、勇者の周りは空気あんねんな。精霊の仕業か？」

「……………」

……………撃えっ!」「ちょ?!」

中立神の化身が消えた位置に、充填していた光弾を撃ち込む。

「着弾確認。 見えていなくても、いつもそこにホシは居る。そういうことね」

「ちょちょちょい待ちーや、トゴ! 久しぶりの再会やのに、なんでそんな素っ気ないん!? ウチ、アレやで!? 敵に寝返った裏切りモンの元仲間やで!? もうちょよつと構ってえ?!」

ふう……と、東郷が一息吐く。

「一つ。洗脳を施されているに拷問以外で聞くべきことなどありません。

一つ。非力な巫女に、満開した私を止める術はない。

一つ。つまり構うだけ時間の無駄。

結論。今すぐ友奈ちゃんを私に返すか、痛めつけられたくなければ大人しくしててく

ださい」

「ああ？ ユツキがどないしたん？」

「ふふふ…いいんです、いいんです、今はしらばっくっていていけば。後でじい…つくり聞かせてもらいますから…」

そう天女のように美しく微笑む東郷の瞳には、光が宿っていない。

「まあ…なんや知らんけども… あの台地な？」

巫女さん達だけやのうて、今向こうから回収してる一般人も居るさかい、吹き飛ばそうとするん止めてほしいねん…」

「人質ですか…」

「そんなつもりは無かったんやけど、まあ、結果的にそうなっとるな」

東郷が真っ直ぐ台地を見据える。

「…トゴ？　おい…？」

目の前を手でひらひらさせても、東郷は瞬き一つしない。

「東郷美森！　これより敵陣に突撃いたします！」

「人の話聞けや?!　てか突撃で特攻ウヴツ!!」

静はガクンと急発進した船体に全身を強打し、東郷は助走無し最大の船速でカッ飛ばしたことで起こったソニックムーブを薄っすら撒き散らし、標的の台地がみるみる巨大化してゆくっ！

（アホッ！アホッ！　中立神の加護無かったらウチ既に死んどるでこらああ?!ああああ死ぬぐづぐづ!!）

東郷にとって裏切り者の命など知ったことではない。

ということではなく、本当に危なければカガミブネで勝手に離脱するだろうと踏んでの放置だった。　実際、静は中立神の加護で死ぬことは無く、致命的な怪我からも必ず復帰する。

天上空が一度一際眩しく輝き、東郷たち目掛けて流星群が降り注ぐ。

「くっ……！部下諸共、撃つか中立神……！」

右！上！下！ツイスト回避！斜め左右下！迎撃！加速！急停止！急発進！デスロール！前進！影分身！超前進！ 大気が無く、空気が抵抗が存在しないお陰で、いつもなら不可能な軌道で東郷が危うく交わし続ける！

「静さん！カガミブネで回避を！」

「ウチらかて、覚悟キメてやっとなのや！ 今更、任務ほっぽっていけるかい！」
空が晴れ上がる。

「（大きいのが来るっ……）あれは受け切れません！早く！」

「そっちこそなんで馬鹿正直に突っ込んでんねん！カガミブネで撤退しろや！」

「そんなのもう試しました！でもこちら側では神樹様のカガミブネは使えないみたいなんです！ だから静さんだけでも早く……！」

静が見上げた視線の先には大きな太陽球が生成されていた。

因果を操作できる神々にとって、星の生成過程をなぞることなど容易いことなのだろう。自らも星の化身である月神ならば、それは尚のこと。

「だらあっもう、なんやねん、もう！　言うとかけど、ジブンのためにやるんちゃうからな!?　ここで死なすわけにいかんだけやから勘違いするんちゃうぞ！」

不自然に継がれたビデオテープのように唐突に視界が切り変わる。

カメラのストロボに目を焼かれたように、東郷の視界一杯に太陽の陰が残留している。

「静さん!?　東郷さんまで…!!」

「スマン、ひなちゃん。　トゴがシメに使うアレに特攻仕掛けよって、こうするほか無かったわ…」

静が、一時的に視力を失った東郷に肩を貸しながら軽く経緯を報告する。

「その声は、ひなたさん…?　二人とも一体どういうつもりで…」

「そうですね…」

東郷を椅子に着かせて、ひなたが計画の全容を告白する。

「どうして言ってくれなかったんですか…」

「そら、勇者たちに市民を騙暗かすの手伝えなんて言えんやろ。

死人までは出させん

としても、自分らの手エ汚したり、重傷者くらいは覚悟せなならん」

「（それに、神樹様の力を纏っている勇者には洗脳が届かないようですからね…）」

…こうなってしまったからには東郷さんにも協力して頂きます。宜しいですね？」

「あの…友奈ちゃんは」

「さっきも言うたけど、ユツキの所在はほんまに知らんで？ 報告も上がつとらんし四国

のどっかに居るんちゃう？」

「そうですか…（ならあの神託は…私が読み違えただけ？ それともひなたさん達が嘘を

吐いている？ もしくは中立神単独の犯行？ 分からない…）」

中立神から神託が下る。

「おっ、ロックたちアレ突破しよったんか。

だいぶコスイ組み合わせにしたつもりやってんが……」

は？ なんやそれw

うたちゃんが鞭に繋いだギン坊を、カウボーイの投げ縄よろしく射出してタウラス撃墜

とかwww ウツソやろwww」

一拍遅れて、東郷にも同じ内容の神託が降りる。

「仕方ありません。次の段階に進めます……」

本来の計画では、用意していたバーテックスを一気に送り込み、神樹様ひいては大赦の敗北を演出する予定でしたが…… 東郷さんが殆ど殲滅してしまったので……はい……すみません……宜しくお願い申し上げます……」

ひなたが言葉を閉めると、突如地面が上へ横へと跳ね上がる。

「きゃあ?!」「ひなちゃんこれ!?!」

椅子から転げ落ちそうになった東郷を静が引き留める。

地響きを上げながら、震度7はあろうかという大地震が神樹の壁諸共月面を引き裂く!!

「投入するのは、勇者たちを打ち滅ぼせるだけの大戦力でなければなりません」

壁際に設置されていた大柵から古書が雪崩落ちては柵が宙を舞い、視界を滅茶苦茶に振り回されて一つ所に焦点を合わせ続けられない。

「しかし、投入予定だった戦力を東郷さんが」「ひなちゃんこの状況でようしゃべれんなあ?!」「休眠中に一掃してしまいました」「これ強すぎませんか?!」「あだっ!?トゴ、満開で船出し!船っ!」「まんっ!」「残された最大戦力——中立神様自ら虎の子を率いて出陣です!」「満開ッ!」

*

「なななななな何何ナニ?! 敵の攻撃!? 地震!? 世界の終わり?!」『落ち着きなさい、すず
「無理だよ怖いよ助けてメブー!」まずは状況報告! みんな、周囲に怪しいものが無い
か確認して!』『何かと言われましても……!』『暗くてなんも見えんぞ、メブ!』『楠! し
ずくが二個目の月が昇ってくるのを見付けた! 多分あれのせいだ!』『でかしたわ、しず
く! シズク!』「つ、月い?!」

水平線の向こうから高速で上昇する光の玉が見える。

「…っ、樹海化しない! (このままだと犠牲が…! 神樹は一体どういうつもりなの!)」
市街に展開していた千景から連絡が入る。

『こちら郡。楠さん、避難者が最後に来たのは何時ごろか分かるかしら?』「最後……?」

『道中襲撃された形跡があるのよ』

千景の言葉を聞いてカッと頭が熱くなり、全身が強張り、力んだ芽吹の手の内で銃剣が
ミシミシと音を立てて軋む。

「…犠牲が出てしまったと…:…:…:ということね……:」

『まだそうとは限らないわ。』

遺体や血だまりが無いところから考えて、攫われたと見るのが妥当ね。

ブービートラップや精神攻撃に利用する場合はあっても、わざわざ遺体の処理をする戦略的意味なんて無いのだから、「生きたまま攫われた」と私たちは考えてる』

「はあ…（よかった…） 続けて」

足元の水鏡に二つの月が浮かんでいる。

『恐らく敵は一般人を死なせないように振る舞っている。人質に取るにしてもそれなら、見せしめに数人の遺体は転がっているはずだもの』『つまり』『樹海化しないのも騒動を起こしたのも、勇者を分断し釘付けにするのが目的——』

「…了解」

千景との通信を切り、防人と球子に指示を伝達。

「総員戦闘準備！ 反撃に出るわよ！」『…』『了解！』『…』

収容した住民たちに異変の大本を撃破してくと宣言し、避難誘導を手伝ってくれていた人たちに、その場を預けて離脱。 高嶋友奈・乃木若葉・伊予島杏・弥勒蓮華・白鳥歌野・乃木園子・鷺尾須美・三ノ輪銀らも郡千景の指示に従い戦列に加わる。

目指すは、月を貫く一本の光の柱。

——ムーンプイラーを発生させていた光の玉が爆ぜる。

光球は光弾へと分解され流星群となって地上を吹き飛ばし、月の宮上空に待機していた中立神の化身が現れて、直下に巨大なクレーターを発生させる。

「千景!」「すでもぬけの殻よ!」「アンちゃん後ろは!?」「大丈夫です!タマっち先輩の輸入道の炎しか見えません!」

焼け野原となったポイントへは直ちに七人御先を派遣して状況を確認し、使用武器に合わせて視力を強化されている杏を高嶋が抱えて運び、死角を潰すことで、一度も立ち止まることがなく急行することができた。

「虚仮脅しにしては無茶苦茶やるな、中立神!」

「伊予島さん!手加減無用よ!」「はい!全力で往きます! 雪女郎っ!」

掛け声と共に、杏を中心にした数キロ圏内で多量の氷の飛礫（つぶて）が生成され、空を滑落する大津波となって中立神の化身に叩きつけられる…!

「数万トンの大質量攻撃だったのに、衝突の衝撃でちょっと振動しただけですか……なら、これならどうですか!」

再び氷の粒を空に巻き上げ、化身をブリザードの中に閉じ込める。

「若葉さん！大天狗の暴風でサポートお願いします！ できるだけ氷の粒同士が衝突するような乱流で！」「なんだか分からんが了解した！ ハッ！」

化身の周りがチカチカと瞬き始める。

「天狗の風に、細かく砕けた氷塊のブリザード。そこから生み出されるものは即ちっ！」

瞬間、視界が真っ白になり、大気を割り砕く轟音が鼓膜を貫く！

「ひゃっ?!雷!？」

氷の粒は積乱雲と成り、最も近くにある物体にイカヅチを撃ち込み続ける！

「これが私の取っておきです！」

「これは行けるんじゃないか、千景!？」

「乃木さん、逐一同意を求めなくていいから…」

雷雲の内側で大爆発が起こり、雲が散らされる。

「っ……多少は効いたようだが健在か！」

外殻には細かい引っかけ傷や、熱による歪みが多数発生している。

化身が月光柱に包まれ太陽球を生成し、勇者たちに向かって流星群を放出する！

「乃木さん、伊予島さん！」 「迎撃する！／＼します！」

雪女郎の猛吹雪で流星群の「 ∞ 」を相殺し、吹雪を突破した「 ∞ 」を大天狗の猛火で焼き払った！しかし吹雪と炎の壁が死角と成り、撃ち出された太陽球への反応に遅れが生じる！

「総員！っ撃えー！！」

危機一髪、輸入道の特大旋陣盤が太陽球を押し留め、乃木園子が西暦組の前に盾を展開！ 鷲尾須美と防人たちが集中砲火を浴びせて太陽球を爆砕した！

「球子！」 「タマっち先輩！」

「ヒーローは遅れてやってくる……待たせたな、みんな！」

「さあ、ムーニーターを打ち取るわよ！」

化身が太陽球を再生成する。

「そればかりか中立神！ 芸が無いナア！」

「全員で行くぞ！ これで決めるッ！」

各々の最大火力を、化身に叩き込む。

「?! 罨っ!？」

太陽球を吸収して化身の姿が消える。それは勇者たちの大火力によって消滅させたという比喩ではなく、喩えるならば、それはまるで月の満ち欠けを早送りにするように瞬時に主体的に姿を消した。

地上を抉って造られた巨大な水鏡に満月が昇っている。

罨に気付いても時すでに遅く、必殺の一撃に込められたエネルギーが大きいほど、引き止めるのに膨大な力が必要と成る。勇者達のうち近接主体の数名は、攻撃を受け止めるのを突然取り上げられたことで踏み込み過ぎてしまい、化身と入れ替わりとなった彼女たちは勇者の総攻撃を受けた。

一部始終、時間の進みが遅くなったように、火に包まれる仲間の一瞬一瞬が網膜に焼き付き、仲間の名前を呼ぶ悲痛な叫びが鼓膜に残響する。

「銀っ：!!」「高嶋さん!!」

悲観に落ちる間も許さず月鏡から数十のガンマ砲が起立し、頭上の月から無数の流星群と化身の収束砲が襲い掛かった。

勇者の行く手を阻むガンマ砲の檻と、天上から圧し潰すように檻の隙間を埋める流星群。自分たちの手によって撃ち抜かれ、力無く夜陰の向こう側に落ちてゆく仲間たち。

物理的に、心理的に、勇者たちを回避不能に陥らせたところに、油断なく撃ち込まれる防衛不可一撃必殺の核力収束砲。

勇者たちは敗北した。

「終わらせないっ！」

化身の砲門にプラズマ球を衝突させて収束砲の射線を逸らし、流星群をレーザー砲で爆散させる。

「はっ?! みんな迎撃態勢を取って!高嶋さん達の救助は私が行くから!」

「私が…私のせいで…」

「乃木さん落ち着いて…! 勇者の力では、同じ勇者に致命傷は与えられない筈よ!」

呆気にとられていた千景が東郷の発破を契機に体勢を立て直すべく号令をかけ、落下してゆく仲間たち目掛けて突貫し、並行してヒビ割れた若葉の心を補強する。

「東郷さん、銀が…! ぎんがあっ…!」

銀を撃ち抜いてしまった須美と、東郷の視線がかち合う。

「須美ちゃん……」

過去の自分でもある須美の内情を察してしまい、これから自身が行うことの非道に苦虫を噛み潰す。しかし、それでも『“誰も犠牲にしない選択”のために』と『理解して寝

返ったくせに』と、揺らぐ自らの心に楔を打つ……

（神樹の勇者たちが追い詰められたところで月の巫女勢力が参戦し、戦況を覆す… その筋書きのために必要だったとはいえ…!）

「皆さん！ あの中立神の化身は、私たちの精霊バリアと同じもので体表を覆っており、巫女の結界破り無しに損傷は与えられません！ 引いてください！」

「巫女」というワードに蓮華と千景が瞬時に食らい付く。

「弥勒達のところに現れたグランディオーソと同じなら、バリア発生源の裏側が薄くなっているはず！ 引く必要はないわ！」

「伊予島さんと乃木さんの雷撃は効いていたわよ。 ……『結界破り』なんて初めて聞くワ

ードだけれど、そんなこと何処で知ったのかしら？」

「それは……っ……!」

このころの杏はまだ知らなかったが、雷は反物質を大量に生成する自然現象であり、対消滅の副次効果によって化身の結界に孔を開けていたのである。

中立神の奇襲が失敗に終わり、化身の堅牢さの謎が解け、攻撃も通るのであれば、勇者

たちが東郷一人に任せる理由は無い。

「あーあー、何しとん。巫女の素質ある言うても、やっぱり勇者やなあ」

返す言葉が見つかからず東郷が押し黙る。

「まあ、元々ウチらだけで片す予定やったわけで。政局は完全にこっちに流れたさかい

気にせんととき」「すみません…」

「静さん、ひなたは！ ひなたは無事なのか!？」

「おん？無事っちゅうか今回の首魁やで、ひなちゃん。…つか、悠長におしやべりできる

状況なん、ジブン?」

「うっ、しまった?!」

若葉たちが見上げた先には、空を覆うほどの大満月が一つ在り、化身の姿は見えない。

「攻撃止んだからって油断しすぎや」

満月が真っ白に輝いて真昼同等の日照で世界を照らし、月を直視していた勇者たちの網

膜が焼かれる。

「ぐううっ！ 目がっ!」

「ぎくんねん、罨でしたーっ♪ 早よ逃げんと死ぬでー?」

「おのれンズさん！」「総員撤退！全力で距離を取れ！」

「まあ逃がしませんけども。ほい、トゴ今や」「きゃああ！」「あんずっ！」「…っ！」
結界破りを施された東郷の銃撃が、背を向けた勇者たちを撃ち落としにかかる。

「あらあ…？ 視力奪われとるはずやのに若が全弾回避しよる…」

スズも、どうやってか全弾防ぎ切つとる…：…なんで…？ まあええわ…」

「静さん、本当にここまでする必要があるんですか…っ?!」

若葉が声と気配を頼りに静たちに向かう…！

「じゃかあしっ！ ハイそこd ドンツ！ っ?!」

大太鼓を叩くような腹に響く大きな音と、天にも届く巨大な水の柱が立ち、中立神の化身を残して月が消える。「あれは?!」高嶋友奈が化身に向かつて一直線にすっ飛んでゆく！

「あ「東郷！静ア！」マズっ——?!」

高嶋の拳が化身の身を砕き、東郷の満開を若葉が両断した…っ！

「――策士、策に溺れる。実戦はセオリー通りにはいかないものよ…… 決着ね」

逆転劇は、最初の奇襲で銀と高嶋と歌野が撃墜されたところから始まる。

千景は気絶したまま空から自由落下する3人を、ガンマ砲に焼かれては復活を繰り返しながら回収し、同時に東郷と静の策謀に耳を傾けていた。

（不意打ち、騙し討ち、追い打ち……効果的で嫌な攻撃ばかりね…… でも、その合理性が仇になることもあるのよ）

先ず、臉をも貫かんとする強烈な目潰しの光を浴びて高嶋たちが気絶から覚醒。

七人御先は7体同時に碎かれなければ斃されることはないが、代わりに精霊バリアの出力は7体で一人分となっている。その特性を千景は利用し、目潰しを食らった自分自身を切り捨てて、新しい分身を生むことで復帰した。

「千景さん、このムーンレイクおかしいわ！ 見る角度を変えても月の位置が変わらない！」

「湖面の月は掴めないと思わせて、空の月が偽物……とか、そんなところでしよう……屈折してるわ……」

きゃああ！

「伊予島さんの悲鳴…！」「ぐんちゃん、私行ってくる！」高嶋さん待つて…！つく！」

「千景さん！アタシらは、この怪しいやつをやればいいんすよね?!」「ええ！」銀君、新技キメるわよ！」「えっあっはい！」歌野スピニッチ・トルネエエドっ！（正：Utrano

Spinach Tornado! 訳：私のほうれん草の渦ー）」

銀の身体を鞭で巻き取ってブンブンと振り回し、遠心力で加速度つけてタイミング合わせて満開し、突撃した衝撃で月鏡の水をすべて打ち上げる。——空に浮かぶ月が消え、

中立神からの密なエネルギー供給を絶たれた化身は高嶋の天ノ逆手に砕かれた。

「——ということよ」

最大戦力を失った静と東郷は大人しくお縄につき、勇者達と情報を共有していた。

「こっちもまあ、カクカク鹿々な感じで…」

「そんなに切羽詰まるまで神樹様の寿命が近いんですか…？ …っ！」

撃たれた背中に火傷を負った杏が、東郷に応急処置を施されながら語り掛ける。

「せやな…… まあ、ウチらも神樹様と中立神様にそう聞かされとるだけやねんけど」

水の抜けたクレーターに転がる、砕けた中立神の化身を眺めながら静がそう答える。

「杏さん……本当にごめんなさい……」

「っ……これくらい……勇者ならっ、治ります……から……」

激痛に笑顔を歪ませながら『すべきことをしただけの貴女は悪くありません』と東郷を案じて許す。

「うああああつ、あんじゅーっ!」

「あの……アタシたち中立神やつつけちゃった訳ですけど……」

その……大丈夫なんでしょうか……?」

「それは大丈夫。これで中立神様がガス欠なるわけでもないし、バトルでは負けてしまっただけど、今頃大赦は針の筵になっとるころよろしな。まだ分らん部分も有るっちゃ有るけども、一先ず、ウチ等ん仕事は完了した。

アヤアヤと、みとりんも神樹様が起こしはるやろ」

芽吹と歌野が、ほっと胸を撫で下ろす。

「そういえば、わっしー先輩。友奈先輩は見つかったんですか?」

——天地が鳴動する。

「ひえっ、また地震?! 中立神倒したのになんで!？」

——クレーターに地下水が汲み上がり、化身の残骸を還元し顕現する。

「よっ、よく考えたら、亡骸が残ってることに違和感を感じるべきでしたわっ……！」

——月鏡から光の玉がゆっくりと飛翔する。大地が割れる。

「こんなんは計画に無い……！」「総員戦闘準備!! 周囲への警戒を怠るな!」「ったく、し

つこいぜ、中立神!!」「満開!」「大天狗!」「酒吞童子!」「七人御先!」「輪入道!」

——明けたはずの空が再び夜の帳に包まれる。

「来るっ……!」

ピカッと閃光が弾けて、次の瞬間には、地の割れ目から突き出された8本の樹木の根に灰色の球体が貫かれていた。

「え、な、なに……?」

球体はサラサラと崩れて、砂に変わってしまう……

「これって……神樹様の……?」

——人間大の白い“それ”は神樹の根の至る所から……カマキリの孵化のように、肉を食い破って蠢く蛆のように、または面砲（めんぱう）から絞り出される膿や角栓のよう、糸を引きながらニユルニユルと大量に湧き出でる。

「人と神と選ばれし者が会する、この世、この現状をゲームで喩えると、天神・月神・地神がゲームマスターであり、プレイヤーであり、世界であり、ルールそのものだが、彼らに対抗したい人類はというと神々が操る盤上の駒にすぎない——

では盤上の駒にすぎない人類種が宇宙の法則にどうやって叛逆する？

ビデオゲーム内の勇者と魔王が、ゲーム世界の外にいる製作者・創造主・コントローラに抗うにはどうすればいい？

かつて人類は、NPCの分際で神に成り上がろうとする、謂わば、バグかエラー的振る舞いを取ったため、デバックの手が入り、リセットが発動した。今でこそ地神に拾われた監督下で勇者システムを動かしてはいるが、プレイヤーの手を離れたがれば、今度こそ手に負えないものとして処分されるだろう。

神が操る駒ではなく、人として神に抗うとは即ちそういうことであり、勇者諸君が人としてこの戦争に勝利することを願うならば、この絶対的不利を破る起死回生の一手が必要だ。そして私はその答えの一つ。自らをミーム化し、ルール即ち、ゲーム制作者であるところの“神”に自らを取り込ませての介入に成功した。

三〇〇年前、神樹は高嶋友奈を取り込んだが、高嶋の魂という核が在ったため完全な同化は起こらなかった。だが私は違う。私は私の行動源基と、参照データ（記憶）と、神樹の枝葉である精霊（アプリケーション）の集合でしかない。

分かるかね？

“この私”には本体足る身体無く、意識無く、魂無く、命が無い。

神樹は己と私の間に線を引き、区別し、切り離すことができない。何故なら“私”は神樹という思考者たちに不可分に溶け込んでしまっているからだ。月神は人を理解するために直接頭を覗き見ることをしたが、神樹は高嶋を召し上げ、更には傀儡を通しての対話を試み、ヒトを模した神を降ろせる依り代“義体”を生み出した。

そこに“私というウイルスプログラム”を差し込んでやったというわけだ。

いやいや、実に愉快じゃないか。古今東西、人の手に負えぬ神霊やバケモノの類には毒酒を喰らわすが定石。

深淵が私を覗くとき、深淵もまた私に診られているのだ。

神に成れない縛りなら、神が私に成ればいい。

伊邪那美も、伊邪那岐も、天照も、月読も、素戔鳴も関係無い。

あいつらの思惑など最早関係無い！ ククク、kアツ！ハハハ！ ひひひ！神殺しは成った!! 私は私の意志に基いて奴らを喰い殺す！ もう、私のものを奪わせない!! 今一度、そして今こそ宣言しよう！」

——宣告。

「…私が神だ」

——死装束を纏いし、白痴の魔王の降誕。

主体無きそれは、主体無き故に視る目を持たず、識る脳を持たず、情報と単純な力の塊としてただ世界に重篤な影響を及ぼす。

「もしかして…氏紙さん…？」

「さあてな？ そう思うのなら、そうなんだろう。お前の中ではな」

それは加賀城雀の問いを曖昧に噛み砕く。

「さて諸君。懸念されていた寿命の件だが、神樹に中立神を吸収したことで新たな権能と、もう暫しの猶予を手に入れた。まずはその感謝を述べたい」

義体を模った一体が、壮齡の紳士のように恭しく、そして白々しく頭を垂れる。

「えっと…氏紙さんですよね？ 状況が呑み込めないので説明して頂けませんか？」

「構わんが、とりあえず伊予島の火傷を直そう」

そう言つて人差し指と中指を揃えて杏を指さすと、少しの間、指示した辺りの明度が上がる。

「……痛みが無くなりました。それも背中中の火傷だけじゃなく全身…」

「跡も残つておらんはずよ。さて芽吹、説明だったな」

見せられた神秘に警戒すべきか、安堵すべきか、勇者たちに奇妙な緊張感が纏わり憑く。

「まあそうな。」

ミーム汚染された神樹が私として振る舞うようになり、君たち勇者が中立神を消耗させたとところを見計らい、元々神樹と中立神間で交わされていた計画を反故にしたことで、キレて顕現した間抜けを喰った。みたいな」

「おい、カエデ！そんな説明じゃ全然わからんぞ！ タマ以外にも分かるようにだな！」

「まあ、別に分かってもらう必要もありませんですしおすし」

「クオノお〜：開き直りやがってえ〜：！」

「で 教育を重点的に攻めたこの神世紀にあっても、ヒトは法があつて初めて文明人となることが改めてハッキリした訳で。新生神として人類に神法をブレゼントしようと思うのだけれど、具体的には成人後、十五年以内に憲法の根幹を習得できなかつた者は段階的に自由を取り上げさせて頂くとといった具合に「待って！」なんだい芽吹？」

左手で蟬谷を押さえながら右手を緩く正面に伸ばし、待てのポーズをとっている。

「ちよつと待って…」

確かに人間は窮すれば攻撃的にもなる…でもそれは置かれた環境の問題でしょう…？

どうして突然、そんな話になつてるのよ」

「まあ、ぶっちゃけて言えば？ w 私は私の好奇心を満たすのに邪魔なやつを取り除きたいつつーだけなんだわ。未開な人類を統治するとかクソ面倒だし、ルール無用の輩は目障りだから段階的に間引くってそんだけの話よ」

「……それは本気で言っているの？」

魔王に銃口を向けて睨みつける。

「そうか気に入らないか。ではこれは止そう」

勇者たちは武器を構えたものの真意を読み取れず、困惑の表情を浮かべている…

「とんでもないことを仰ったかと思えば、その割にあっさり撤回して下さったり、一体なんなんですか… 笑えないジョークは止していただけませんか、氏紙さん？」

魔王が胡坐をかいて語り続ける。

「では人類のルールを決めるのは人類に任せて、私は違憲審査権と刑事罰執行権のみを持つこととしよう。神の視点によって逃走犯は罰を逃れることが不可能となり、迷宮入りする刑事事件は消滅し、なんと冤罪も発生しなくなる。

これはつまり、人類コミュニティの利害関係から完全に独立した、完全中立の最高裁判所の創出、ということ、国民主権をそのままに、法の運用における人類の欠点のみを取り除いた執行神／裁定神の利点総取りってことだ。

君たちに譲歩し折衷案を出してみたが、これならどうか？」

「……確かに、その言葉通りなら素晴らしいことかもしれないが……私たちだけで決めて良いことではないだろう……」と、若葉が納刀して呟く。

「……具体的に罰の施行ってどうするつもりなの？

違反者は全て殺してしまえば良いというものでもないし、罰金刑とかあるでしょう？

前言は、デコイで本命はこっちのようだし、言葉通りには呑み込めないわ」と千景。

「私は神だ。故に基準となるルールさえあれば、縁起を括って公正世界仮説を現実のものとすることができる。因果応報というやつよ」

芽吹が追及する。

「答えているようで質問の答えになっていないわ。　どうやって、それを実現するのかと

聞いているのよ」

「だからそれは、人知を超えた方法で如何にでもできると言っている」

ハア……と魔王が溜息を吐き、雀がおずおずと間に割って入る。

「あ……あのおー……難しい話はこちらまでにして、今日はもう遅いし明日に……なんでもご

「じゃいまチェン……」

「?! いや、スズズの言う通りや! みんな今すぐ避難所に行きつ!」

「ホワイ? どうしたの静さん?」

「なんや分らんバケモンに襲われとるて、ひなちゃんから……!」
「大天狗!!」

「乃木さんっ!?!」

ひなたが襲われていると聞いて脊髄反射的に大天狗を降ろし若葉が飛び立つ。

「一般人を人質に取る気……!」

魔王が満面の笑みを浮かべて放言する。

「いや? 私は人質なんか取る必要ないからねえ。ただ考えられることとしては、さっ

き黄泉の穴を塞いでいる千曳岩を少し動かしたから、そのせいかもしれないね?」

「……徳島の山川町がそうではないか等、黄泉比良坂伝説の舞台を四国と考える説は確かにありますが……まさか本当に四国に……?」

「そういう話ではないんだよ、伊予島さん。」

四国を根で囲ったときから、四国は根の国の一部だったのよ。

そして知っての通り、根の国と黄泉の国は繋がっているわけで。私の言う千曳岩っての

は観念的な比喩表現であって、特定の地や物体を指しているわけではない。

まあ、そんなわけで、ここがクライマックスだよ勇者たち。

信じて理を受け入れるか、私と死ぬか二つに一つだ」

「ふざけるな！ 今ここでお前を止めて、その勝手な言い草も白紙にしてやるっ!!」

肘を突いて横になった無防備な魔王に芽吹が斬りかかるが、刃筋が勝手に逸れていく。

「くそっ！ くそっ…!! どうして！」

「人知を超えた方法で縁起を操れると言ったろ？ これがその実演だ。

そもそもここは私の世界なのだから、私に刃向かえるわけもない。例えば——」

「だ、あ、あ、あっ!!」

渾身の力で振り下ろした銃剣が魔王の首を捉えた。しかし、魔王は生首のまま芽吹に

悍ましい言葉を浴びせ続ける。

「こんな風に、現身を破壊したところで私は殺せないし意味は無い」

「メブ!?」「芽吹さん!?」 返り血を浴びて呆然と震えて立ち尽くす芽吹のもとに、仲間たちが駆け寄って魔王から引き離す。

「桶に何しやがったテメエ!」

「分かりきったことを聞くなよ、シズク。」

「あの私」と「この私」とに差異はあるが、そんなことは重要なことじゃない。あの私に条件が加わったことで生まれたこの私は、あの私の未来の一つであり「この私」を殺すということは「あの私」も条件次第で殺してしまえるということそして、この身体を切り裂かせたことで殺人体験を与えた」

魔王が口を開く度に、粘度の高い血液がドロドロと溢れ出る。それはぐちゅにちゅと不快な音を立てて泡立ち、見るもの聞くものを戦慄させた。ゆらゆらと待機していた夥しい数の現身たちが一斉に動き出し、星も月も消えた奈落の底で、穢れを知らぬ花たちが咲き誇る——「私は私を遂行する」